

東京成徳大学大学院心理学研究科
博士論文（要旨）

McCloskey 理論を用いた 実行機能のアセスメント

—特別な教育的ニーズをもつ子どもへの
適用をめざして—

2024 年度

東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻
名越 斉子

論文要旨

本研究の目的は、日本の特別な教育的ニーズをもつ子どもの実行機能の実態を的確に捉え、支援につなげることのできる実行機能アセスメントの開発とその活用のあり方の検討を行うことである。

研究 1 では、主に 2000 年代に刊行された国内外約 330 論文を調査し、実行機能の概念、発達、測定法、支援の研究動向について以下について明らかにした。まず、実行機能は、現在と将来の適応を予測し、環境が発達に影響することから、教育でも重要と考えられるようになっているが、実践と効果検証はこれからである。また、実行機能の支援を要する子どもに利用できる測定法が日本で未整備である。生態学的妥当性が高い教師評定法は有用だと考えられるが、開発に留まらず、課題型との関連や複数者評定の扱い方といった実施および解釈や支援への活用も視野に入れた検討を要する。

研究 2 では、McCloskey の実行機能理論を整理し、包括的実行コントロールモデルの第 2 層自己調整（7 クラスタ、実行キャパシティを測る 31 下位スケール）と第 3 層自己認識・自己決断（2 クラスタ、実行キャパシティを測る 5 下位スケール）を測定範囲とする教師評定尺度 McCloskey Executive Functions Scale の日本語版（J-MEFS）を開発した。項目の文化適合や予備調査を経て、2019 年に収集した小中学校通常学級在籍児童生徒 1187 名のノルムデータで標準化を行い、原版と類似した記述統計特性があることを確認した。また、主にノルムデータを用いて、確認的因子分析による内的構造の側面からの妥当性の証拠、教師による学力判断等との収束的、弁別的な妥当性の証拠等を示し、J-MEFS が McCloskey 理論に則した形で実行機能の発達を捉え、個人内差を把握しうることを示した。しかし、異なるサンプルや障害種別の検討、臨床的

な妥当性等の更なる妥当性の証拠の収集が課題として残された。

研究 3 では，16 事例の J-MEFS の結果の分析を通じて，McCloskey 理論を用いた実行機能アセスメントは特別な教育的ニーズをもつ子どもの実行機能の強さと困難を捉え，支援に活かせる指針が得られる可能性を示すとともに，複数者評定の活用等の留意点等を示した。また，3 ヶ月間の支援実践では通級担当者，担任，子どもの評定結果の一致・不一致の分析により，自己調整の学習文脈優位性が明らかになり，モニターの実行スキル支援に活用された。知能検査結果も加味した McCloskey の 4 方略を用いた本人の考えを尊重した足場的支援により，内的コントロールによる自己調整の向上が認められた。事例数と支援期間が限られているため，さらなる事例の蓄積と多角的検討が必要であることを示した。

最後に，主に実践的観点から McCloskey 理論を用いた実行機能のアセスメントと支援のあり方を討論した。そして，実行機能アセスメントツールや本人主体の well-being の追求を視野に入れたアセスメントモデルの提供等による学問的，実践的貢献について触れ，本研究の限界および今後の課題を論じた。